

## 専任教員教育研究業績

平成29年5月15日記入

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
井上 博子	いのうえ ひろこ	保育学科 通信教育課程	教授 准教授・講師・助教	男 女

小田原短期大学における担当科目名

音楽表現ⅠA 音楽表現ⅠB 音楽表現Ⅱ

学 歴		学位
和暦(西暦)年 月	事 項	
平成21(2009)年3月	福岡教育大学大学院教育学研究科修士課程修了	修士(教育学)
平成21(2009)年4月	熊本大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程入学	
平成26(2014)年3月	熊本大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程修了	博士(文学)
平成26(2014)年4月～ 平成28(2016)年3月	九州大学大学院地球社会統合科学府研究生	

育 歴・職 歴

名 称	期 間	教育内容又は業務内容
北九州市公立学校	昭和51年4月 ～平成19年3月	教諭
小田原短期大学保育学科 通信教育課程	平成27年4月 ～平成28年3月	非常勤講師(音楽表現ⅠA・ⅠB)
小田原短期大学保育学科 通信教育課程	平成28年4月 ～現在に至る	准教授(音楽表現ⅠA・ⅠB、音楽表現Ⅱ)

所 属 学 会 等

名 称	活動期間	活動内容(役職等の活動を含む)
日本音楽教育学会	平成19年4月～現在	大会参加・口頭発表
日本音楽学会	平成28年4月～現在	大会参加

社 会 活 動 等

名 称	活動期間	活 動 内 容
北九州市小倉少年少女合唱団	昭和52年4月～現在	指導者・伴奏者
北九州少年合唱隊	平成2年1月～現在	指導者・指揮者

担当教科目に関する資格・免許等

名 称	取得年月	取 得 機 関
小学校教諭専修免許状	平成21年 4月	福岡県教育委員会(平21小専修第1号)
中学校教諭専修免許状 (音楽)	平成21年 4月	福岡県教育委員会(平21専修第6号)
高等学校教諭専修免許状 (音楽)	平成21年 4月	福岡県教育委員会(平21高専修第10号)

研究実績にする事項

代表的な著書、論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概 要
(学術論文) 1. 我が国の少年合唱団の現状と課題	単著	平成21年2月	福岡教育大学大学院教育学研究科修士課程学位論文	ウィーン少年合唱団初来日後その歌声に魅せられ我が国にも多くの少年合唱団が創立されたが現在は団体数が激減している。本論文は少年合唱の起源や歴史、セミナリヨの音楽教育、唱歌コンクール等、歴史における少年合唱を概観した基礎的考察を行い、南材木町小学校の実践、品川三郎の実践、長谷

2. オペラ《ヘンゼルとグレーテル》に見るグリム童話の音楽化	単著	平成 22 年 3 月 25 日	熊本大学社会文化研究 8	<p>川新一の実践等先行研究等を吟味し、更に 10 団体対象のアンケート調査によって隊員数の推移や意識を分析し、現状と課題を考察している。また海外の事例として 1000 年の歴史を持つレーゲンスブルク大聖堂少年合唱団と、歴史は浅いが実力を持つ合唱団として注目を集めるテルツ少年合唱団の 2 つを取り上げ、西洋との社会的・歴史的背景の違いを探っている。</p> <p>ドイツの作曲家 E. フンパーディンク作曲のオペラ《ヘンゼルとグレーテル》について、人物像やストーリー展開、社会的背景等をグリム兄弟による『子どもと家庭の童話』の原作と比較検討し、音楽化に至る経緯を分析している。オペラ曲中のドイツの子どもの歌について調査し、関連を明らかにすると共に、オペラ全編の調性と拍子を分析することによって音楽的特性を考察し、更に作曲者と台本作家、当時の時代背景・文化等音楽化に際しての関連内容を明らかにしている。</p>
3. ドイツ音楽における少年合唱—《マタイ受難曲》、《パルジファル》、《カルミナ・ブラーナ》を事例として—	単著	平成 23 年 3 月 25 日	熊本大学社会文化研究 9	<p>ドイツを代表する 3 作品中の少年合唱について分析し、変遷や役割、音楽的効果、意義について明らかにしている。《マタイ受難曲》では復活上演の際の少年合唱の役割の変遷を、《パルジファル》では全編に流れる宗教性をもたらす音楽的効果を、《カルミナ・ブラーナ》では原典との比較に重きをおいて少年合唱の立場と位置づけを分析し、演奏に際しての作曲者の意図する少年合唱の役割について問題提起をしている。</p>
4. クレンデに見るドイツ少年合唱の一流流	単著	平成 24 年 3 月 25 日	熊本大学社会文化研究 10	<p>クレンデとは貧しいラテン語学校の生徒たちが街を回り歩き、家々の前で聖歌を歌い、僅かな喜捨を受けた少年聖歌巡回合唱隊のことである。ドイツ少年合唱の一流流と思われるクレンデについて、クレンデの概要、歴史、背景、意義、現在の状況などについて、調査、分析、考察している。クレンデには多くの苦難があったが現在も名称として受け継がれていることや、女性が教会では歌うことが出来なかった時代にディスカントを受け持ち、それが多声合唱音楽の発展へと繋がったことに言及している。</p>
5. マーラー《嘆きの歌》改訂における少年の声の存在	単著	平成 25 年 3 月 25 日	熊本大学社会文化研究 11	<p>《嘆きの歌》は改訂が繰り返され、初稿の完成から 21 年後に最終稿によって初演された。《嘆きの歌》の原作となるグリム兄弟の『子どもと家庭の童話』とベヒシュタインの『新ドイツ・メルヒェン集』との関連性を紐解き、改訂の経緯を調査し、改訂はなぜ繰り返されたのか、改訂によって少年の声の存在がどのように推移したか、改訂の意図などを考察し、《嘆きの歌》における少年の声の重要性について考察している。</p>
6. ドイツ音楽史における少年合唱の意義と役割—少年合唱団の現状	単著	平成 25 年 10 月	熊本大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程学位論文	<p>本論文は、我が国の少年合唱団の盛衰を踏まえながらドイツ音楽史における少年合唱の歴史的・社会的位置づけに目を向け、その存在に新たな光を当てようとしたものである。ドイツ全土にわたる少年合唱団 40 団体を対象としたアンケート調査に基づいてドイツの少年</p>

と課題を踏まえて—				合唱団の現状と課題を分析し、教会音楽の継承、歌唱芸術の継承、教育施設としての役割など、その存在意義を明らかにした。ドイツの少年合唱団の一事例としてベルリン大聖堂少年聖歌隊を取り上げ、歴史、現在の組織や指導体制、活動状況などを報告し、ベルリン・ジングアカデミーとの関連についても言及している。得られた知見をもとに少年合唱の意義と役割をまとめ、課題と展望を提言している。
7. 《マタイ受難曲》ライブ ツィヒ蘇演と少年合唱—ツェルターとメンデルスゾーンのかかわりを通して—	単著	平成 26 年 3 月 25 日	熊本大学社会文化研究 12	今日《マタイ受難曲》の第1曲目と第29曲目のコーラルは、少年合唱が受け持って歌うという形態がほぼ定番となっているが、ベルリン及びライブツィヒ蘇演の際にはソリストたちが歌っている。コーラル演奏はいかにして少年たちによって受け持たれるようになったのかという経緯を弟子フェーリクスと師ツェルターとのかかわりを通して論述している。バッハの時代から今日に至る少年合唱の役割の変遷を問うものである。
8. ドイツの少年合唱団における発声指導法の研究 (I) —発声指導用語の日独比較を通して—	単著	平成 27 年 2 月 27 日	九州大学大学院地球社会統合科学府平成 26 年度研究生論文	テルツ少年合唱団の創立・指導者であるゲルハルト・シュミット・ガーデン著『声の育成法』 <i>Wege der Stimmbildung</i> を基に、声区と声域に関わる発声指導用語を日独の比較を通して研究したものである。ここでは、「胸声」と「頭声」に焦点をあて、「(声帯) 全体の声」を日独「(声帯の) 縁の声」、「声区の混合」等の概念を再検討し、内容を整理・分析している。また、それらが実際の指導の場でどのように使用されるかについて他の独語文献との比較検討を通して論述した。
9. ドイツの少年合唱団における発声指導法の研究 (II) —発声指導用語の日独比較を通して—	単著	平成 28 年 2 月 26 日	九州大学大学院地球社会統合科学府平成 27 年度研究生論文	上記論文の深化のため、主として「呼吸」と「支え」に関する用語の適切な翻訳表現を考察している。様々な解釈があり誤解を招きやすい用語に関して、著書にある独語を基に分析すると共に、他の独語文献の表現とも比較検討を重ねた。また、感覚的イメージを持たせるための発声指導用語について日本語と独語の表現比較を行い、生徒たちの理解を促し、深めることができる独語から日本語への翻訳表現の在り方を考察している。
(研究ノート) 1. オルフ・シュールヴェルク《クリスマス物語》音楽劇構成に関する一考察—テルツ少年合唱団の演奏をもとに—	単著	平成 29 年 3 月	小田原短期大学研究紀要 47	オルフの教育理念の一つである「誰でも演奏できる平易な音楽によって行う音楽教育」は、保育者養成の短期大学において、誰もが持っている音楽的感覚の芽生えを呼び起こす活動として、音楽科学習や幼児の音楽活動において有効に生かすことができるものである。本研究は、《子どものための音楽》Musik für Kinder と共に、オルフ・シュールヴェルクとしてまとめられている《青少年の音楽》Jugendmusik の一つである《クリスマス物語》を取り上げている。オルフ自身による台本を翻訳し、楽譜から読みとった音楽構成を分析している。更に、テルツ少年合唱団による演奏をもとに、音楽劇としての構成・表現を考察したものである。

<p>(学会発表)</p> <p>1. 我が国の少年合唱団の現状と課題</p>	<p>単独</p>	<p>平成 21 年 3 月</p>	<p>平成 20 年度日本音楽教育学会九州地区例会（開催場所：大分大学）</p>	<p>少年合唱の起源、男子による合唱音楽の歴史、我が国の少年合唱団の成立など歴史における少年合唱を概観した基礎的考察を基に我が国で活動中の少年合唱団 10 団体へのアンケート調査を行い、歴史や現状を調査、分析し、社会的・歴史的背景を探り、少年合唱団の教育的効果をまとめ、ドイツの少年合唱団 2 団体の事例と比較検討し、少年合唱の現状と課題を明らかにした。</p>
<p>2. オペラ《ヘンゼルとグレーテル》に見るグリム童話の音楽化</p>	<p>単独</p>	<p>平成 22 年 2 月 20 日</p>	<p>平成 21 年度日本音楽教育学会九州地区例会（開催場所：福岡教育大学）</p>	<p>前記論文「オペラ《ヘンゼルとグレーテル》にみるグリム童話の音楽化」の内容と共に、2010 年度北九州市音楽科教育課程第 3 学年鑑賞教材「オペラ《ヘンゼルとグレーテル》」を題材とした北九州市立小学校第 3 学年での授業実践による教育的成果と課題を発表した。</p>
<p>3. 合唱の音楽表現に関する一考察</p>	<p>共同</p>	<p>平成 26 年 3 月 15 日</p>	<p>平成 25 年度日本音楽教育学会九州地区例会（開催場所：鹿児島大学）</p>	<p>前述の書 <i>Wege der Stimmbildung</i> を基に、主として呼吸法と発声法に関する指導内容を整理・分析したものを小学校合唱部においてその一部を実践し、実践を通して得た成果と課題を報告した。</p>